



Title	<書評> Judith Butler, "The Psychic Life of Power : Theories in Subjection", Stanford University Press(Stanford, California), 1997
Author(s)	藤高, 和輝
Citation	年報人間科学. 2011, 32, p. 237-241
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11911
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Judith Butler
The Psychic Life of Power: Theories in Subjection
Stanford University Press(Stanford, California), 1997

藤高 和輝

はじめに

本論で扱うのは、Judith Butler, *The Psychic Life of Power: Theories in Subjection*, 1997, Stanford University Press(以下「PLP」と略記)である。本書は、『ジェンダー・トラブル』や『問題Ⅱ物質なのは身体だ』(*Bodies That Matter*)に続くきわめて理論的な色合いの濃い著作であり、そこでバトラーはヘーゲル、ニーチェ、フロイト、アルチュセール、フーコーといった多彩な思想家たちを縦横に論じている。

私は、この著作において一つの論点をなしている、フーコーの権力論と精神分析理論との関係性という問題に焦点を合わせた。この問題はすでに『ジェンダー・トラブル』において顕在化していた。いったい、権力論と精神分析理論とは本当に両立するのか、とバトラー自身問われてきたのである。⁽¹⁾したがって、その問いに対する応答の試みとして、本書を読解したい。

主体化のパラドックス

権力論と精神分析理論の双方が交差する領野を問題にする上で、まず私たちは主体化という過程に構成的であるパラドックスを確認しよう。

フーコーの権力論に従って、バトラーは権力に二つの契機をみている。

(1) 主体が権力によって従わされる契機と、(2) 主体になる(*Becoming a subject*)契機とある(PLP, p.2)。「従属化Ⅱ主体化」と定式化される「フーコーの主体形成の理論は、必然的にパラドックスに陥る。というのは、それを説明するとき、従属を通じて「主体になる」にもかかわらず、主体形成に先立つものを仮定せざるをえないからである。「本質論」はも

ちろんだが、「構築論」もまた、主体形成の前に、すでに生じた(あるいは、これからなされると想定される)社会的構築を前提してしまう。これは明らかに循環的な議論であり、バトラーによると「パラドックスがその議論を構造化している」(PLP, p.10)。このことはむしろ、私たちが主体形成の十全な説明を「喪失」しているという兆候なのかもしれない。このパラドックスは主体形成の理論にとつて構成的な矛盾である。「私の目的は」、パラドックスを解決することではなく、このパラドックスが「たいてい両価性(ambivalence)の指示を帰結すること」(PLP, p.10)である、とバトラーは主張する。

エージェンシーの両価性

バトラーはこのパラドックスをエージェンシー概念によって説明している。エージェンシーは権力への従属によって可能になる。その意味で、権力はエージェンシーの「条件」であるが、しかし、主体は権力に還元されないし、権力は主体に還元されない(PLP, p.16)。両者のあいだで還元不可能な、両価的な形象がエージェンシーである。

主体の条件とみなされた権力は、必ずしも主体が行使すると言われる権力と同じではない。主体を創始する権力は、主体のエージェンシーである権力と連続的なままであることはできない。権力がエージェンシーの条件としての地位から、主体「自身の」エージェンシーへと移行するとき……潜在的に可能な反転が生じる(PLP, p.12)。

つまり、エージェンシーは権力によって条件付けられ、可能になっているにもかかわらず、潜在的には権力を「超えている」(PLP, p.15)のである。クイアは、セクシュアル・マイノリティに対する誹謗中傷である一方で、そのような「権力の目的」を超えて、それに対して反転し、反抗を企てるというアクロバティックな運動を構成した。この両価性が「エージェンシーの心臓部」(PLP, p.18)で反復されるものである。

フーコーにおける「魂」概念の再構築

次に、私たちは権力の心的な領域を明らかにするために、そもそもそれがどうして必要な作業なのか、バトラーのフーコー批判を通じて考察する。

フーコーは『監獄の誕生』で、魂を「身体の監獄」として定式化している。そこでは、魂はそれによって「身体が陶冶され、形成される権力の道具」(PLP, p.90)とされる。魂がこのように身体を拘束するものであるなら、それは「まるでラカンの象徴的なものを一方的に受け取るもの」(PLP, p.86)に思える。そしてバトラーは次のように問うている。「精神分析的に豊かな概念である心的なものを拘禁する魂の概念に還元することは、規範化と主体形成への抵抗の可能性を、正確に言えば心的なものと主体のあいだの克服不可能性から生じる抵抗を消去することになるのではないか」(PLP, p.87)。

また、フーコーの身体に関する定式は以下のように揺れている。フーコーは『性の歴史I』で権力の外に身体はないとしながらも、「ときどき彼の説明は身体を……権力関係と存在論的に異なった物質性を維持しよ

う」(PLP, pp.89-90)と考えているようにもみえるからだ。後者の場合、彼は身体を権力が介入する「場所(site)」とみなす。この場所としての身体は、「拘禁する魂」と相補的な関係にあるように思われる。身体を純粹な内部性に、魂を外部性に位置づけるこの枠組は「内面化」のモデルに基づいており、より洗練された権力の心的領域を理論化する必要があるだろう。

そこでバトラーは、『監獄の誕生』における、それとは異なる、物質性と備給のあいだの関係性の構成」(PLP, p.90)のほうを強調している。それによると、身体の物質性はまさに権力関係の中で生産される。その意味でバトラーはこの過程を「物質化(materialization)」と呼んでいる。「監獄はそれが権力によって備給されるかぎりで物質化される」(PLP, p.91)。さらに、バトラーはフーコーの「ニーチェ、系譜学、歴史」を引用して、「身体の破壊を通してのみ主体は「分裂した統一体(dissociated unity)」として現れる」(PLP, p.91)という点を指摘する。つまり、「主体は……身体を監禁状態に枠付け、形成する魂として作用する」のだが、「主体は身体を犠牲にして現れる」ということである(PLP, p.92)。ここで、彼女ははつきりと精神分析の用語を導入して、心的なものは「身体の昇華」であると主張する。だから、身体は「構築が生じる場所ではなく、主体が形成される際の破壊である。この主体の形成はまず身体の枠付け、従属、規制であり、破壊が規範化の内部で……保存される様式である」(同上)。この意味で心的なものは、その下で身体が物質化される、あるいは破壊される「歴史的に特定の想像的な理想である」(PLP, p.90)。身体は「一種の構成的な喪失」(PLP, p.92)という形で主体に生き残るのであ

る。

法と権力

心的なものが「歴史的に特定の想像的な理想」であって、象徴的なそれではないことに注意を向ける必要があるだろう。なぜなら、ラカンは「社会的な権力の概念を象徴的な領域に制限した」からであり、逆に、フーコーは象徴的なものを権力関係として鋳直した」のだから(PLP, p.98)。しかし、バトラーはフーコーの「法」の定義には批判的である。フーコーは精神分析的な法を批判しており、というのは精神分析的な法は欲望を外部に前提しこれを禁止するものだが、むしろ欲望は権力によって生産されたものだからである。フーコーの「抑圧仮説」批判は、権力を法に、つまり抑圧あるいは禁止の機能に還元してしまい、「生産的権力」を捉えることができない、という点にある。

逆にバトラーは、フーコーが精神分析における法を捉え損なっていると批判する(PLP, p.205)。まさに精神分析における抑圧や禁止、すなわち法は欲望を生産するのである。バトラーによると、フロイトにおける「リビドーの抑圧は、それ自体リビドー備給された抑圧である」(PLP, p.70)。抑圧はそれが禁止するリビドーによって維持されるし、リビドーはその禁止によって保存される。リビドーの抑圧は欲望を否定するといふより、むしろ「禁止された欲望を再生産するよう求める」(PLP, p.56)のである。したがって、いかにも奇妙なことだが、バトラーからすれば法を抑圧の機能に還元しているのは、フーコーの方なのである。このように法が生産的なものと理解されると、法と権力という二つの用語に

は克服できない曖昧さ」(PLP, p.205)が残るが、バトラーは徹底してそこに留まるのである。

彼女の近親姦タブーの批判はこの点から解釈できるだろう。バトラーは、精神分析において近親姦に対する一次的で象徴的な禁止に由来すると考えられているエディプス・コンプレックスは、「欲望の異性愛化を仮定しているから」、「近親姦の禁止は同性愛の禁止を前提にしている」(PLP, p.135)と指摘した。これは単なる精神分析批判であるだけではなく、象徴的なものに社会規範が入りこんでいることを示す「実践」でもある。この実践によって明らかになった、法／権力の「二つの用語には克服できない曖昧さ」において、精神分析理論と権力論は交差するのである。

メランコリー

バトラーにおいて、メランコリーはまさにそのような交差点である。メランコリーは喪失した対象への同一化である。フロイトによると、まず対象への愛があり、対象は失われると自我に取り込まれる。『自我とエス』では、メランコリーにおける「代償」行為が、自我の形成において大きな役割を果たす⁽²⁾とされる。バトラーも言うように、メランコリーの前にあらかじめ、自我／対象、内的世界／外的世界が区別されているわけではない。むしろメランコリーによって、この区別が形成される。なぜなら、「対象」として自我が知覚されるのは、バトラーが「メランコリック・ターン」と呼ぶ反省性を通じてであるからだ。

「対象から自我への反転(mun)は自我を生産する」(PLP, p.168)。そ

れは第一に、この反転を通じて、自我は「知覚可能な対象の地位」(同上)を獲得するからであり、第二に対象への固着は自我へのそれに変換されることを通じて、自我は「心的対象」として形成されるからである。「自我は対象を代理するだけではなく、この代理の行為が喪失に対する必要な応答、あるいは「防衛」として自我を設立するのである」(PLP, p.169 強調原文)。

フロイトによると、愛情関係に特徴的な両価性——愛と憎しみ——の葛藤は、「メランコリーに特有の出口が生じるまでは……意識されないままである」⁽³⁾。この両価性が「意識に再現される」ようになるのは、「自我と批判的審級」の対立、すなわち自我と超自我の対立が現出するときである。メランコリーにおける両価性は自我／超自我という「内的地勢学」に先立ち、それゆえ、この地勢学は「メランコリーの効果」(PLP, p.174)なのである。

したがって、バトラーによると「喪失の結果」、両価性が「意識されないまま」生じる。そのうちに内的世界——自我／超自我の「内的地勢学」——が再現＝表象される。この喪失の代理過程は、自我／対象、内的世界／外的世界の区別を作りだす。

ところで、メランコリーにおいて一体何が喪失されたのだろうか。

メランコリーにおいて、他者あるいは理想の喪失が失われているだけでなく、そのような喪失が可能になる社会的世界もまた失われているのである。……したがって、自我は「政治体」と、その「主要な制度」の一つである良心になる、正確に心的な生は世界が要求す

る喪失を無効化する努力において社会的な世界をそれ自身に取り込むからである (PLP, p.181)。

失われたのは他者や理想だけでなく、「そのような喪失が可能になる社会的世界」でもある。自我形成の発端に「どんな喪失が悲しまれる否かを規制する」(PLP, p.183) 社会的権力が関与しているのである。バトラーにおける foreclosure(予めの排除)——それはラカンの概念だが、彼女はそれをはっきりとフーコーの権力概念と結びつけるのである。

フロイトはメランコリーの愁訴は「語の古い意味で……告訴である」⁽⁵⁾といったが、バトラーはホミ・バーバを引用して、メランコリーは一種の「反抗(revolt)」であると主張している(PLP, p.190)。というのは、「社会的世界」が喪失され取り込まれるのだが、この「心的理想化」は権力を外的対象としては「消去」するからである。「心的理想化」の過程を通じて、社会的権力はいわば「埋葬される」のであり、これは一種の「反抗」なのだ。ここで重要なのは、権力は主体に単に「内面化」されるということではなく、社会的言説が「隠され、向きを変えられる運動を通じてのみ」——すなわち、メランコリック・ターンを通じてのみ——「心的になる」(PLP, p.197) ということである。

同一化の過程にはこのような「喪失」の「歴史性」が見いだされる。「そのような見方において、「リビドー」と「固着」は……決して十分には回復されない歴史性を持つものとして知覚される」(PLP, p.194)。したがって、「両個性の心的地勢学のなかに含まれる、隠された社会的テキストは、主体の形成における様々な種類の系譜学を要求する」(PLP, p.196) ので

ある。

おわりに

フーコーの権力論と精神分析理論とを接合するような試みは、バトラーが言うようにその理論家双方から「避けられ続けた仕事」(PLP, p.3) である。この仕事を理論化した点は、彼女の功績として大いに評価されるべきだろう。さらに、この仕事は『ジェンダー・トラブル』以降のバトラー思想の動向を考える上でも貴重なものである。

しかし、それは新たな疑問を呼び起こすものでもある。「起源」が「喪失」であるにせよ、それはバトラーが批判していたはずの「主体の普遍性」の議論であることは否めない。彼女は近年「普遍性」についてよりいっそう踏み込んで考察しており、これらの考察も議論の俎上に載せた上で、さらなる研究が必要になるだろう。

註

(1) ジュディス・バトラー (高橋愛訳) 『ジェンダー・トラブル』十年後の序文『現代思想』2000年12月号 p.72

(2) ジグムント・フロイト (中山元訳) 『自我とエス』『自我論集』p.227, 2006

ちくま学芸文庫

(3) フロイト (中山元訳) 『喪とメランコリー』『人はなぜ戦争をするのか』p.129, 2008, 光文社文庫。

(4) ——— 同

(5) ——— 同 p.112